【優秀論文】

『群衆心理』から考える国民の責任

～『華氏451度』論～

3年3組30番　細淵さやか

Ⅰ　はじめに

『華氏451度』は、アメリカのSF/ファンタジー作家のレイ・ブラッドベリによって書かれ、1953年に発表された長編小説である。この小説は、焚書を扱ったSF小説として知られている。しかし、本論文では焚書についてではなく、焚書が行われる社会に暮らす国民はどういった性質を持つのか、そこに焦点を当てていきたい。

『華氏451度』を論じていくにあたり、以下の手順に沿って進めていく。まず、物語のあらすじと登場人物について述べ（Ⅱ）、『華氏451度』の社会構造を明らかにし、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆心理』をもとに国民の定義を定め（Ⅲ）、主人公モンターグが求めた「しあわせ」とは何なのかを考察する（Ⅳ）。最後に、『華氏451度』における国民の責任について分析する（Ⅴ）。

Ⅱ　あらすじと登場人物

『華氏451度』は、本の所持が禁じられた社会を描いた物語である。本の所持が露見すると、家ごと「ファイアマン」によって燃やされてしまう。この物語には、ありきたりで簡単な内容ばかりの報道やテレビ、新聞、そして何でも短く簡潔に圧縮するというように「分かりやすさ」と「スピード」を重視する社会が広がっている。国民は、ものを考えるということをしなくなり、どんなこともすぐ忘れてしまう。この本は、そんな表面上の平穏によって保たれている社会を描いている。

主人公のガイ・モンターグは、本を燃やす「ファイアマン」の一人である。冒頭はモンターグの「火を燃やすのは愉しかった」[1]という言葉から始まる。この言葉から、モンターグは燃やすことにただ快楽を抱き、自分がしている行為が何のためなのかといった細かいことは何も考えていないことが分かる。つまり、主人公のモンターグ自身がこの社会の国民と同様に考えることをしない人間だということである。しかし、クラリス・マクレランという十七歳の少女との出会いが、モンターグを大きく変えることになる。彼女はモンターグの家の隣に越してきた少女で、モンターグと話をするようになる。

> あの子は物語がどう起こるかではなく、なぜ起こるかを知りたがっていた。[2]

これは、モンターグの上司ベイティーが彼女について語ったときの言葉である。彼女は、物事になぜと疑問を持ち、考えることを楽しむ少女だった。ゆえに、彼女は考えることをしないこの社会にとって異質な存在だったといえる。そんな彼女は、ある日モンターグに「あなた幸福？」[3]と問いかける。そのときモンターグは幸福だと答えることができなかった。モンターグはこの問いかけによって「おれは幸福じゃない」[4]と気づく。モンターグは、クラリスの問いによって初めて自分自身を振り返ることになる。この出来事で根幹が揺らぎ出したモンターグをさらに変える出来事が起こる。モンターグら「ファイアマン」は、本を所持している人物がいるとの通報を受け、ある老女の家へと駆けつける。本が発見され、「ファイアマン」らは老女の家を燃やそうとするが、老女は本と共に燃やされる運命を選ぶ。この老女の姿にモンターグは衝撃を受けるのである。

---

[1] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.11
[2] 前掲、p.102
[3] 前掲、p.21
[4] 前掲、p.24

女は燃える家に残ったんだぜ。あれだけのことをするからには、本にはなにかがある、ぼくらが想像もつかないようなものがあるにちがいないんだ。[5]

モンターグは、老女がそうまでして本に執着したからには本には「なにか」があると考え始める。クラリスと老女との出会いによって、モンターグは今までの自分自身にも今の社会にも不信感を抱き、本に答えを求めるのである。そんなモンターグに正気に戻れと説き伏せる人物・上司のベイティーが現れる。ベイティーは、何かとモンターグを気にかけ、この社会に適合した人物へと導こうとする。彼は、老女との一件から社会に不信感を抱いているモンターグに対してなぜ本を禁じる社会になっていったのかを捲し立てる。

哲学だの社会学だの、物事を関連づけて考えるような、つかみどころのないものは与えてはならない。そんなものを齧ったら、待っているのは憂鬱だ。[6]

ベイティーは、考えることをする学問や本を与えてはならない、それらは社会を不安定にさせる、自分達「ファイアマン」は社会の平穏を守っているのだと語る。さらに、「本はなにもいってないぞ！」[7]、「お前は迷子になるだけだぞ」[8]と、本には「なにか」があるのではないかと考えるモンターグの心境を読んだかのような発言をする。しかし、ベイティーの発言がかえってモンターグを駆り立て、より一層本を求めさせることになる。ベイティーに「反抗」するため、モンターグはある人物のところを訪ねる。それが後にモンターグの協力者となるフェーバーという人物である。彼は、元英文学の教授で「知識人」の一人、そして考えることを放棄した社会に反発できなかった人物である。

ぼくらは、しあわせになるために必要なものはぜんぶ持っているのに、しあわせではない。なにかが足りないんです。[9]

これは、モンターグがフェーバーに言った言葉である。彼は、モンターグが求めているのは本ではなく、「かつて本の中にあったもの」[10]だと語る。こうして、モンターグはフェーバーの力を借りながら、社会に「反逆」する立場になるのである。

『華氏451度』は、本の所持を禁じられた社会の中で何の不安も抱かず、逆にそんな社会を守る側だったモンターグが最終的に「反逆者」の道を選ぶ物語だといえる。そのため、この物語のメッセージは、本を禁じることへの批判のようにみえる。しかし、本当にそうなのだろうか。根本的な原因は本を禁じることではなく、国民の姿勢ではないか。この物語での国民は自ら本を手放したわけで、初めから本を禁じられたわけではない。つまり、彼らはただの被害者なのではなく、加害者的要素を持っている。本論文では国民に焦点をあてて『華氏451度』を分析したい。国民を対象にするにあたって、ギュスターヴ・ル・ボンの『群衆心理』をもとに考察していく。

Ⅲ　社会構造と国民

(1) 社会構造

『華氏451度』の国民について触れる前に、まずこの物語の社会構造がどうなっているのかをまとめておきたい。『華氏451度』は、本の所持を禁じられ、「分かりやすさ」と「スピード」を重視する社会を描いているが、そうなった経緯は何だったのだろうか。その疑問について触れているのがモンターグの上司ベイティーである。

---

[5] 前掲、p.87
[6] 前掲、p.103
[7] 前掲、p.105
[8] 前掲、p.105
[9] 前掲、p.138
[10] 前掲、p.138

この状況はいつから始まったんだろう？当然そういう疑問はわくな。（中略）実際のところ、われわれの暮らしにまとまりができはじめたのは、写真術が確立されてからなんだ。つぎには一活動写真、二十世紀初頭のころだな。ラジオ、テレビジョン。いろんな媒体が大衆の心をつかんだ。[11]

ベイティーによると、発端はマスメディアの登場であり、マスメディアが大衆の心を掴めば掴むほど「中身の単純化」[12]、「社会の加速化」[13]が起きた。大衆は「分かりやすさ」と「スピード」を重視する。だから、複雑で分かりづらいものよりも単純で分かりやすいもの、時間がかかるものよりもかからないものを求める。マスメディアは大衆の需要に合わないものはつくらない。その結果、映画や雑誌、本はありきたりな内容になり、フィルムの速度は上がり、本は短く圧縮され、時間のかからないダイジェスト、タブロイドといったものばかりになっていった。「社会の加速化」は、一見効率を良くし、空いた時間が作られるようにみえて、実のところ人々の「考える時間」の搾取を意味する。教育においては「就学年限は短くなり、規律はゆるみ、哲学、歴史、外国語は捨てられ、英語や綴りの授業は徐々に徐々に遠ざけられ」[14]ていく。その結果、大衆は知性を失い、ものを「考える」ことができなくなっていった。さらに、本の排除の一番の原因となる「少数派への過剰な配慮」が起こる。これは、思想の違いによって生じる論争を発生する前に潰してしまおうということである。人口が増えれば必然と少数派は増え、論争が生じるものである。マスメディアはその論争を「少数派への過剰な配慮」によって未然に防ぎ、さらには論争を生む思想を持つ本を邪険の対象とした。本は「政府お目こぼしのコミックと古き良き告白ものと業界紙」[15]だけが残された。人間は自分より知識があり、賢い人間に劣等意識を抱く。よって、本と「知識人」は差別の対象となり、人々を劣等意識から守るという名分で「ファイアマン」が発足されるのである。

したがって、本の所持の禁止・「ファイアマン」の発足は、マスメディアの確立から始まった「中身の単純化」、「社会の加速化」、そして人々の「考える時間・能力」の消失、「少数派への過剰な配慮」という一連の流れの終着点だといえる。しかし、これらの経緯は全てベイティーによる解釈であり、ベイティーの解釈の真偽を確かめることはできない。ベイティーは、「引金を引いたのはテクノロジーと大衆搾取と少数派からのプレッシャー」[16]だとして決して強制されたからではなく、国民が望んだ結果だと解釈し、「いまはみんな夜も昼もしあわせに暮らし」[17]ていると主張している。しかし、戸田山和久は、このベイティーの主張は「責任転換の気味」[18]があり、「背後に潜む権力の作用を巧妙に隠蔽しよう」[19]とする意図があると主張している。要は、『華氏451度』での社会は、本の所持を禁じられるに至った一連の流れを権力者が巧みに利用した独裁政治だということである。

(2) 心理的群衆と国民

ここまでは、社会構造について触れてきたが、次は国民に焦点を当てていきたい。隠された独裁政治によって成り立つ社会で生きている国民は一体どんな性質を帯びているのか。本論文では、『華氏451度』の国民は『群衆心理』において述べられている「心理的群衆」と同じ性質を持っていると考える。

そもそも、「心理的群衆」とは一体何なのか。「心理的群衆」について、『群衆心理』では以下

---

[11] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.91
[12] 戸田山和久（2021）
『レイ・ブラッドベリ「華氏451度」：本が燃やされる社会』NHK100分de名著、p.62
[13] 前掲、p.63
[14] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.94
[15] 前掲、p.98
[16] 前掲、p.98
[17] 前掲、p.98
[18] 戸田山和久（2021）
『レイ・ブラッドベリ「華氏451度」：本が燃やされる社会』NHK100分de名著、p.66
[19] 前掲、p.66

のように定義されている。

> ある一定の状況において、かつこのような状況においてのみ、人間の集団は、それを構成する各個人の性質とは非常に異なる新たな性質を具える。すなわち、意識的な個性が消えうせて、あらゆる個人の感情や観念が、同一の方向に向けられるのである。一つの集団精神が生れるのであって、これは、恐らく一時的なものではあろうが、非常にはっきりした性質を示すのである。[20]

つまり、「心理的群衆」とは「意識的個性の消滅」と「感情や観念の同一方向への転換」の二つの心理作用を起こした人々を指し、単に大勢の集団を指しているのではなく、個性のない皆同じ考えを持った組織のことである。「ある一定の状況において、かつこのような状況においてのみ」とあるが、これはただ人が集団になれば「心理的群衆」を構成するわけではないことを意味している。「心理的群衆」の構成には「ある刺戟の影響が必要」[21]であり、大なり小なり「何らかの影響」[22]が大前提だということである。

では、実際に『華氏451度』の国民を「心理的群衆」に当てはめていく。「意識的個性の消滅」と「感情や観念の同一方向への転換」が見られる存在、これは人との違いがなく、皆同じ存在、つまり「取り替え可能な存在」[23]と言い換えられる。この「取り替え可能な存在」とは、戸田山和久が『華氏451度』の国民を評した表現である。

国民が「取り替え可能な存在」だと分かるエピソードは、モンターグの妻ミルドレッドの自殺未遂だろう。ある夜、ミルドレッドは睡眠薬の大量摂取で死にかけ、モンターグは救急に助けを求める。しかし、医者ではなく、オペレーターがやって来て、ミルドレッドの体から睡眠薬を抜くために機械で体液を入れ替えて帰っていった。オペレーターたちが持っていた機械は「コブラ」[24]（蛇）に例えられており、戸田山和久は『華氏451度』の社会は「機械と動物の違いがない」[25]、よって「人間も機械」[26]のように扱われると述べられている。機械は壊れたら新しいものに変えられる「取り替え可能なもの」、つまりこの社会の「人間も機械」と同様ならば、この社会の人間は「取り替え可能な存在」だといえる。人間は機械のようなものだから、医者ではなくオペレーターが対応にあたり、彼らが「こういった患者は一晩に九人十人といてね」[27]と語っていることから、これが日常であることが分かる。

さらに、人間が「取り替え可能な存在」であるからこそ、この社会では生と死の重みや責任が軽んじられている。生死の重みに関しては、ミルドレッドの自殺未遂の件で自殺が珍しくないことからも察するが、より人々の生死に関する感性が伺えるのはクラリスの言葉である。クラリスは、モンターグに同級生について以下のように語っている。

> おない年の子どもたちって怖いわ。殺しあいをしてるもの。昔からこうだったの？　伯父にいわせれば違うって。わたしの友だちが去年だけでも六人撃たれてる。車の衝突で十人の友だちをなくしてる。おない年の子どもたちは、わたしが怖がるから、わたしを嫌ってるわ。伯父の話に出てくるお祖父さんの時代には、子どもたちが殺しあうことなんかなかったそうよ。だけどそれはずっと昔で、そのころはなにもかもまるっきり違っていたんですって。誰もが責任というものを重んじていたと、伯父はいってる。わたしも責任を感じてるわ。[28]

---

[20] ギュスターヴ・ル・ボン（1993）『群衆心理』（櫻井成夫訳）、p.26
[21] 前掲、p.26
[22] 前掲、p.27
[23] 戸田山和久（2021）
『レイ・ブラッドベリ「華氏451度」：本が燃やされる社会』NHK100分de名著、p.30
[24] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.27
[25] 戸田山和久（2021）
『レイ・ブラッドベリ「華氏451度」：本が燃やされる社会』NHK100分de名著、p.24
[26] 前掲、p.24
[27] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.29
[28] 前掲、p.52,53

この社会は、子どもたちが平気で殺しあいをするほど、生と死を尊重する気持ちが存在しない。これは、人間が「取り替え可能な存在」だという認識が染み込んでいるからだろう。人間が軽い存在であるなら、人間に対して責任を負う必要もない。『群衆心理』では、群衆の中にいる個人は「その群衆に名目がなく、従って責任」がない場合「個人を抑制する責任観念が完全に消滅してしまう」[29]と述べられている。要は、群衆の一員になると、個人は大勢いる中の一人になり、群衆から感じる「不可抗力的な力」[30]によって考えなしに行動してしまうということである。これは、『華氏451度』の子どもたちにも当てはまり、周りもしていることだから人間を撃っても轢いても問題ないという思考になるのだろう。

よって、『華氏451度』の国民は「取り替え可能な存在」であること、責任感がないことから、「心理的群衆」と同じ要素を持っているといえる。しかし、「心理的群衆」は「ある刺戟」があって構成されるはずのものである。『華氏451度』の国民にとっての「ある刺戟」とは何か。それは、(1) で触れた社会構造にある。『華氏451度』の社会は、一見国民が望んだ通りに実現された社会のようにみえて、実際のところ「分かりやすさ」と「スピード」という効率の良さを望む国民の性質を利用して支配する独裁政治である。従って、この社会に属しているだけで、国民は「取り替え可能な存在」になることを無意識に強制される。そのうえ、「取り替え可能な存在」ではない存在、つまり個性がある存在は自然と排除されるようにできている。本を所持していた老女がそうであるし、クラリスにもいえることである。クラリスは、最後車に轢かれて死んでしまうからである。モンターグはクラリスの死を四日たってミルドレッドから聞き、ミルドレッドはそれまでクラリスの死をすっかり忘れていた。この社会では、人の死はすぐ忘れ去られ、なかったことにされてしまう。

以上のことから、『華氏451度』の国民は、「心理的群衆」であるといえる。ただし、『群衆心理』では、「心理的群衆」は「ある刺戟」によって「一時的」に組織されるものであって永続的ではないと述べられている。しかし、『華氏451度』のように社会そのものが「ある刺戟」である場合、「心理的群衆」はその社会が続く限り構成されることになる。つまり、『華氏451度』の国民は「一時的」ではなく、この社会構造が存続される限り「心理的群衆」にならざるを得ないのである。そのため、国民が「心理的群衆」から抜け出すのはとても困難になる。

Ⅳ　モンターグが求めた「しあわせ」

Ⅲ章では、『華氏451度』の社会構造について、そして国民は「心理的群衆」と同じ性質を持ち、社会に属しているだけで「心理的群衆」の一員になってしまうことを述べた。社会に属しているだけで「心理的群衆」の一員になってしまうことは、主人公モンターグも例外ではない。しかし、モンターグは社会に対して「反逆」することを決意した。Ⅳ章では、なぜモンターグは「心理的群衆」から脱却できたのか、そして脱却してまでモンターグが求めた「しあわせ」とは何なのかを考えていく。

(1) モンターグが「心理的群衆」から脱却できた理由

なぜモンターグが「心理的群衆」から脱却できたのか、もちろんモンターグが最初から「心理的群衆」ではなかったとか、特別な人間だったからではない。その証拠に、モンターグが同業者たちの顔を見まわしたとき、鏡に自分の顔を映したみたいにみんな自分とそっくりな顔をしていることに気づくシーンがある[31]。ここから、モンターグ自身も複数いる「ファイアマン」の一人でしかなく、「取り替え可能な存在」だったことが分かる。

では、なぜモンターグが「取り替え可能な存在」ではなくなったのか。それはⅡでも触れたがクラリスの影響が一番大きいだろう。クラリスは、モンターグに対して自分と自分の家族の話をよくしていたが、モンターグ自身についての話も聞きたがった。また、クラリスの問いは「あな

---

[29] ギュスターヴ・ル・ボン（1993）『群衆心理』（櫻井成夫訳）、p.33
[30] 前掲、p.33
[31] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.57

た幸福？」といったイエス・ノーでは答えられない疑問であり、考えることが求められるものであった。クラリスは、モンターグにしか答えられない答えを求めており、彼女にとってモンターグは「取り替え可能な存在」ではなかったことが分かる。つまり、モンターグはクラリスのおかげで「取り替え可能な存在」から脱却できたのである。

もう一つ、「心理的群衆」に見られる性質として責任能力の欠如が挙げられる。Ⅲ章では、「心理的群衆」は、誰もが「取り替え可能な存在」であるからこそ、人に対して責任を負う必要がなく、生と死を尊重する気持ちも存在しないと説明した。しかし、作中にはモンターグが責任を感じていると思われる箇所がある。それは、モンターグの周りで起こる「死」が関わる場面でみられる。

一つは、モンターグが、Ⅲでも触れたミルドレッドの自殺未遂の件について振り返ったときである。ミルドレッドは死にはしないものの、作中で最初に最も「死」に近づいた人物だといえる。

> もし彼女が死んだとしても、自分は泣かないだろう。（中略）不意にすべてが誤りであるような気がして彼は泣きだしていた。だがそれは死を前にしたからではなく、死を前にして泣くことのできぬ心への悲しみだった。[32]

これは、ミルドレッドの自殺未遂に対する、モンターグの心情を語った文である。生と死が尊重されない社会に暮らすモンターグは、ミルドレッドの死に対して悲しいという感情を抱くことができない。しかし、この時点で既にモンターグには、彼女の死そのものを悲しいとは思えなくとも、悲しいと思えないことに悲しいと感じる心は存在している。モンターグは、初めて「死」の一歩手前を目にしたことで、「死」は軽いものではないのだと肌で実感することになる。

さらに、モンターグの周りでは、老女とクラリス、二人の死が起こる。本と共に燃やされる運命を選んだ老女に対して、モンターグは老女を「焼き殺してしまった」[33]と後悔している。クラリスについては、モンターグ自らがミルドレッドに、彼女のことを知っているかと尋ね、彼女が既に死んでいたことを聞かされる。ミルドレッドは、クラリスの死をそれまですっかり忘れており、モンターグは「どうしてもっと早くいってくれないんだ？」[34]とミルドレッドに問い詰めている。クラリスの死を忘れていたミルドレッドに対し、モンターグはクラリスの姿を見かけなくなったあとも彼女のことを気にかけていたのである。

ミルドレッドがクラリスの死を忘れていたように、「心理的群衆」は周りの誰かが死んだとしてもすぐ忘れ、「死」に対して感情を抱くことはない。しかし、モンターグは既に死んでしまった人物のことを振り返り、悲しみや後悔といった感情を抱いている。よって、モンターグはこの三つの「死」に触れたことで、「死」の重さを実感し、生と死を尊重する気持ちが生じたのだといえる。

さらに、「死」を連想させるものといえば、それは戦争である。ジェット機による爆音など、作中では度々戦争に関することが触れられているが、モンターグは戦争に関することについて以下のように語っている。

> ぼくらは二〇二二年以降、二度、核戦争を起こして、二度とも勝利した！　それは、この国の暮らしが愉しすぎて、ほかの国のことを忘れてしまっているからか？　ぼくらだけ裕福でほかの国は貧しいのに、気にもかけないからか？　うわさで聞いたぞ、世界じゅうが飢えてるのに、ぼくらはたらふく食ってるって。世界じゅうが必死に働いてるのに、ぼくらは遊んでるって、ほんとうなのか？だからぼくらはこんなに憎まれてるのか？憎まれてるというわさも、何年も前から、ほんのたまにだが、聞いたことがある。なぜだか知ってるか？（中略）本を読めば、おなじ狂気のあやまちをくりかえさずにすむかもしれないじゃないか！[35]

---

[32] 前掲、p.74
[33] 前掲、p.87
[34] 前掲、p.80
[35] 前掲、p.123

ここで、初めて過去に戦争が二度起きていたこと、他国に関する情報について触れられる。モンターグは、自国と他国を比較し、国同士の間に存在する不平等、またそれを誰も知らないことを「狂気のあやまち」だと表現している。彼は、過去、そして他国という外に目を向け、自国にはそれらに対する責任があると主張しているのである。このセリフから、モンターグに責任能力が生じていることが分かる。

ゆえに、モンターグは、ミルドレッドや老女、クラリス、そして戦争から、「死」には必ず責任が発生することに気づく。だから、モンターグはその責任を負うためにも、責任を放棄している社会に対して「反逆」する必要があるのである。

したがって、モンターグは、クラリスの問いによって「取り替え可能な存在」から脱却し、身近にいる人間の「死」によって責任をもつことの重要性に気づいたことで、「心理的群衆」から脱却できたのである。

(2) モンターグの気づきと記憶

「心理的群衆」から脱却し、社会への「反逆」を決意したモンターグだが、最終的に妻ミルドレッドの密告によって、自身の家すらも燃やすはめになり、ミルドレッドは彼を置いて去っていってしまう。追い込まれたモンターグは、上司ベイティーを焼き殺し、犯罪者として追われる身となり、フェーバーの助言から川を目指して田舎へと逃げることになる。逃亡のさなか、モンターグは川に流されながら「なぜこの先、一生、二度とものを燃やしてはいけないのか」[36]と考えを巡らす。

> 太陽は毎日、燃えている。太陽は“時間”を燃やしている。世界は円を描いて猛進し、軸回転し、時間は年月と人びとを燃やすのに忙しい。おれがなんの手助けもしなくとも、その営みはつづく。だからおれがほかの昇火士といっしょになってものを燃やし、太陽が“時間”を燃やしていたら、なにもかもが燃えることになってしまうではないか！[37]

太陽は月を照らし、地球に日を注ぎ、太陽自身をも光らせる。さらに、時間は太陽の動きによって生まれる。だから、太陽は「太陽と地球上のすべての時計」[38]であり、「“時間”を燃やしている」のである。太陽が時間を燃やしているのなら、モンターグら「ファイアマン」がその他のものを燃やしてしまえば、残るものは何もない。ここで、モンターグは、今までの「ファイアマン」としての行為がただの破壊行為でしかなかったことに気づく。

モンターグは、フェーバーに「ぼくらは必要なものはぜんぶ持っているのに、しあわせではない」[39]と語っている。モンターグが言う既に持っているものというのは、社会から与えられた便利な家電製品やテレビなどの娯楽品といった生活必需品のことを指している。しかし、モンターグは、それらがあったとしても「しあわせ」になれない、「しあわせ」になるために必要なものは「ファイアマン」が燃やしてしまったと主張しているのである。では、「ファイアマン」が燃やし、「しあわせ」になるためにモンターグが求めたものとは何なのか。

それは、モンターグのミルドレッドに対する態度から考察できる。テレビ依存症のミルドレッドは、いつもモンターグの問いかけに対して上の空で会話が成り立たず、しかもモンターグはミルドレッドによって密告されてしまう。しかし、モンターグはそんな彼女とのコミュニケーションを最後まで諦めなかった。このことから、モンターグは彼女に「なにか」を求めていたのだと考えられる。また、モンターグが彼女に自分たちが「いつ」「どこで」出会ったのか問いかけるシーンがある。彼女は、その質問に「わからないわ」と答え、「そんなことどうでもいいわよ」[40]と言い切る。モンターグはその答えにショックを受けるが、モンターグ自身も自分たちの出会いを忘

---

[36] 前掲、p.235
[37] 前掲、p.235
[38] 前掲、p.234
[39] 前掲、p.138
[40] 前掲、p.73

れてしまっているのである。そのときのモンターグの心情を表している文がある。

> 目の上に両手をあて、記憶を定位置に押し込むように強い力をかけつづけた。彼にとって、はじめてミルドレッドと会ったのがどこなのか知ることが、とつぜん生涯でなによりも重要なことに思われてきた。[41]

この言葉から、モンターグは一部の記憶が欠落した状態にあり、彼はその記憶を欲しているのだということが分かる。つまり、モンターグが求める「しあわせ」には記憶が鍵になるのである。

大まかに記憶といっても、記憶には種類がある。記憶の種類に関して、小森陽一は「意味記憶」、「エピソード記憶」、「手続き記憶」の三つを挙げている。「意味記憶」は言葉や概念といった知識に関する記憶、「エピソード記憶」は「体験そのものをめぐる記憶」、「手続き記憶」は排泄の手順といった人間が生きていくのに必要な後天的に身につけていく「諸手続き」に関する記憶を指す[42]。その中でも、モンターグが失った記憶は「エピソード記憶」に当たる。「エピソード記憶」は「『いつ』『どこで』『だれと』ということをめぐる記憶」[43]だとも表現されており、モンターグはミルドレッドと「いつ」「どこで」出会ったのかを忘れているため、「エピソード記憶」を失っているといえる。さらに、「エピソード記憶」は「自我の形成に深くかかわる記憶」[44]であり、「エピソード記憶」の欠落は自我の欠落を意味する。自我とは、他者とは違う自分自身のことを指す。よって、自我の欠落は自分がない、個性がないということであり、「心理的群衆」だと言い換えられる。「エピソード記憶」の欠落は「心理的群衆」に見られる要素であり、「心理的群衆」である国民は皆「エピソード記憶」が欠落しているといえる。

では、「エピソード記憶」の欠落の原因とは何か。

そもそも「エピソード記憶」は海馬によって統合され形成される。海馬とは、大脳辺縁体に存在する記憶に関わる構造のことを指し、感覚器からのバラバラの情報を一つにまとめてエピソードにする役割を担っている[45]。さらに、海馬が睡眠中に記憶のリプレイを行うことによって「短期記憶」から「近時記憶」、「長期記憶」[46]へと記憶が定着化されていく。ただし、その海馬による記憶のリプレイには「記憶の改変」[47]が見られる。海馬は、快・不快という感情をもとに、好きなことや関心事は誇張し、目を背けたい事柄・現実は都合良くゆがめて記憶する[48]。ゆえに、海馬によって形成される記憶は一概に事実だとはいえないのである。海馬による「記憶の改変」は快・不快という感情があってこそ生じるが、この快・不快は海馬の近くに位置する扁桃核によって感じられる。人間の感情は扁桃核があって生じ、扁桃核から伝わる感情という情報によって海馬では記憶が形成されていく。よって、「エピソード記憶」は感情が伝わる扁桃核、記憶を統合する海馬の流れを経て形成される。

「エピソード記憶」の形成までの流れから、「エピソード記憶」の欠落の要因は根本の扁桃核、その扁桃核で扱う快・不快という基本的な感情にあると考察できる。Ⅲ章では『華氏451度』の社会のことを国民の性質を利用することで国民が望んだように見せかけた隠された独裁政治だと表現したが、これは独裁のために国民が不快だと感じることを意図的に遠ざけた社会だとも言い換えられる。

例えば、Ⅲ章の（1）で触れた「少数派への過剰な配慮」でいえば、これは少数でも思想の違いから不快に思う人間が生じるのを避けたいという思惑だと解釈できる。また、ベイティーは「葬式は悲しみをもたらすし、異教の匂いがする」[49]として、人が死んでも葬式などせず、すぐ焼却

---

[41] 前掲、p.73
[42] 小森陽一（2006）『心脳コントロール社会』ちくま新書、p.51
[43] 前掲、p.51
[44] 前掲、p.51
[45] 前掲、p.28
[46] 前掲、p.28
[47] 前掲、p.28
[48] 前掲、p.28,29
[49] レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房、p.101

炉で燃やしてしまえと発言している。悲しみというマイナスの感情をもたらす葬式は、この社会では排除対象なのである。ベイティーは、他にも「ひとつの問題に二つの側面があるなんてことは口が裂けてもいうな。ひとつだけ教えておけばいい」[50]とも主張している。これは政治問題を指しての発言だが、政治に限らず問題事というのはプラスとマイナスの二つの側面があるものである。しかし、ベイティーは、マイナスな面は人々を不快にさせるからと、人が快に感じる面だけを見せて、不快な面は初めからなかったかのようにすれば良いと言ってるのである。

よって、『華氏451度』の社会は不快から遠ざけられた社会だといえ、その社会に暮らす国民は「不快が欠けた感情」が常態となる。「不快が欠けた感情」というのは、感情の一部が欠けているため、その欠けた分の感情に値する記憶も欠けることになる。つまり、その欠けた記憶というのが「エピソード記憶」なのである。

ここで、話をモンターグに戻すが、モンターグはこの「エピソード記憶」をなくし、それを取り戻そうとする。彼がミルドレッドに自分たちの出会いについて尋ねたのは、彼女にも自分たちの「エピソード記憶」を思い出してほしいと求めたからである。「エピソード記憶」は「体験そのものをめぐる記憶」、つまり思い出である。「エピソード記憶」の欠落は、実際にあったはずの過去、思い出すらもなかったことにしてしまう。ミルドレッドがモンターグに対して淡白だったのは、彼との思い出が欠けた彼女にとって、モンターグは赤の他人に等しかったからである。しかし、モンターグは、彼女とのそんな関係を打開したかった。そのためには、思い出を記憶するために必要な快・不快の両方の感情が必要なのである。社会によって意図的に一部が取り除かれている感情では、記憶すらも取り除かれてしまう。したがって、モンターグは「しあわせ」になるために、不快をなくしてしまった社会から不快という感情を取り戻そうとしたのである。

V　国民の責任

『華氏451度』では最後、戦争によって全て破壊される。「そして戦争がはじまり、その瞬間に終わった」[51]という文から分かるように、一瞬で戦争がはじまり、一瞬で戦争が終わるのである。モンターグは、その戦争が始まった瞬間にミルドレッドとどこで出会ったのかを思い出す。戦争によって不快が取り除かれる社会が破壊されることで、モンターグはミルドレッドとの記憶を取り戻すのである。『華氏451度』は、モンターグが戦争で破壊された街へと歩き出すところで幕を閉じる。

その際、街に向かって歩き出すのはモンターグ一人ではない。モンターグが逃亡した先で出会う放浪者たちも一緒に街へと向かうのである。彼らは、教授や博士といった「知識人」であったがために社会での居場所がなく、逃げてきた人々であり、本の中身を頭に記憶することで、時がきたら、その記憶をもとに一から本を記録してやり直そうとしていた。彼らは「愚行を記憶している人間」[52]を集める必要があると語っており、この「愚行」とは、人間の失敗や過ちといった負の面を指している。つまり、彼らは人々が目を背けてきた現実を直視し、それを記憶している人間を欲しているのである。「愚行」の記憶を重視している彼らは、国民を不快から遠ざけようとする社会とは真逆な存在だといえる。彼らは、モンターグよりも先に不快という感情に向き合うことの重要性を理解し、それに立ち向かおうとしていたのである。

そのために、放浪者たちは本を記憶することに力を注いでいる。しかし、なぜ本を記憶することが重要なのか。小森陽一は、「人間の物語能力」というのは「記憶そのもの」[53]だと述べている。本は「人間の物語能力」によって作られるものである。よって、本は「記憶そのもの」であり、放浪者たちは記憶である本をさらに記憶していることになる。なぜ放浪者たちは記憶をさらに記憶するということをしているのか。それは、人間の記憶は自分自身または外部によって簡単に歪められてしまうからである。人間の記憶は、海馬によって形成されるが、その海馬では「記憶の改変」が行われる。人間は不快に感じる記憶を自分の都合に合わせて歪めてしまうところがある。

---

[50] 前掲、p.102
[51] 前掲、p.263
[52] 前掲、p.272
[53] 小森陽一（2006）『心脳コントロール社会』ちくま新書、p.51

また、社会が意図的に人々から不快という感情を遠ざけようとすれば、人間の記憶は簡単に奪われる。よって、人間の記憶は不確実なのである。一方で、本は一度書かれれば誰からもその記憶を侵害されることはない。本は、人間が目を背けたい事柄でも変わらず記憶し続ける。だからこそ、人間には本という変わらない記憶が必要なのである。

『華氏451度』の国民の責任は、不快なことから逃げたことにある。人間には、不快という感情によって生れる記憶があり、現実がある。マスメディアが発達した社会ならなおさら、人間が快に感じる情報だけを強調して現実を曖昧にしてしまうことは簡単である。不快から目を背けない強い意思がなければ、人間は「心理的群衆」となり、社会の「自動人形」[54]になってしまう。

『華氏451度』は、マスメディアが発達した社会の中で、国民一人ひとりのあるべき姿勢を説いているのである。

（13,835文字　原稿用紙34.5枚相当）

[54] ギュスターヴ・ル・ボン（1993）『群衆心理』（櫻井成夫訳）、p.35

【参考文献および関連URL】

●ギュスターヴ・ル・ボン（1993）『群衆心理』（櫻井成夫訳）
●小森陽一（2006）『心脳コントロール社会』ちくま新書
●武田砂鉄（2022）『ル・ボン「群衆心理」 2022年11月』NHK100分de名著
●戸田山和久（2021）
『レイ・ブラッドベリ「華氏451度」：本が燃やされる社会』NHK100分de名著
●レイ・ブラッドベリ（1953）『華氏451度』（伊藤典夫訳）早川書房